

# 来ぶらり52

## もう1つの文字 点字・：・

最近では駅の自動券売機やエレベータの階数表示のそばに、点が凸に盛り上がったぼちぼち形を見かけることが多い。これが点字である。わが学習院大学にも西5号館のエレベータには点字表示がある。

点字は本来手で触って読むものだが、凸に盛り上がった所を黒く表して印刷し目で見てわかるようにしたものがあり、墨点字とよばれる。これを用いて晴眼者（普通に目が見える人）は点字の練習をする。ここでも墨点字を用いて説明するが、本来の点字は凸に盛り上がりがあり、手で触って読むものである。試みに西5のエレベータの点字を手で触って何の字かあててみるといい。点字を触って読むことがいかに難しいかわかるであろう。ある中途失明者の人は、点字の1字が読めるようになるのに1か月かかったという。中途失明者には点字ができない人が多い。盲人は日本全国で30万人ぐらい、そのうち、点字が読める人は1割にすぎないという。

点字は6個の点よりなる。すべての点凸になっている $\therefore$ は日本語点字では、仮名のメを表すのである。6個の点凸が平らかで区別されるから、数字の理論によれば $2^6=64$ 個の組み合わせができることになる。ただし、すべてが平らなら、なにもない事と同じで空白を意味するとする。これを入れても64字しかできない。日本の仮名文字はイロハ50字、英語はアルファベット26字だから、どちらかに限ればかろうじて足りる。しかし、こ

のほかに数字はあるし、かつことか句読点とか、いろいろな記号が必要だから、64個ではすぐに足らなくなる。

さてタイトルに用いた $\cdot$   $\therefore$   $\therefore$ はこの順にアイウと読む。しかし、英語としてはABCと読む。しかも、これらは数符と呼ばれる記号 $\therefore$ を頭につけると123を表すのである。

ウルトラマンに出てくるツインテールという怪獣は、からだは寝ているのに、しっぽをぐっと持ち上げて攻撃してきてなかなかの迫力であった。私は数符 $\therefore$ を見るたびにツインテールを思い出すほどである。ツインテール $\therefore$ があればそれは次の文字が数を表すことを覚えておこう。たとえば $\therefore$   $\therefore$   $\therefore$ は123を表す。駅の券売機の点字を見るとすぐにツインテール $\therefore$ を発見できるであろう。そこで料金表示のための数字が点字としてかいてあることがわかる。これがわかると少しうれしい。

数符の使い方を知ると計算機に詳しい人は思わずこういってしまう。「点字で使われる技法はアセンブラ語のそれと似ている」と。6ビットコードを組み合わせて複雑な文字や記号を表し、音楽に使われる記号や諸国の文字も、最近では漢字までも点字で表現できるのである。計算機の原理にもっとも近い文字が点字である。それもあってか、最近では普通の漢字仮名交じりの文章のファイルをいれさえすれば点字が出てくるソフトも誕生している。これも十分実用性が高い。

（理学部教授 飯高 茂）

### 日本語日本文学の貴重書

**編集委員** 日本語日本文学研究室では、どのようなものを貴重書として扱っていますか？

**日本語日本文学研究室** 近世までの写本や刊本です。和本が中心ですが、唐本や洋書も含まれます。

**編** 例えばどのような資料がありますか？

**日** 室町時代の古典注釈を中心とする三条西家旧蔵本（約一〇〇点）、俳諧資料のコレクションである也有文庫・殿田文庫（約一、〇〇〇点）、近世初期に刊行された古活字版のマイクロ・フィルム（約四〇〇点）を中心とする反町文庫などで、例えば、伊勢物語、枕草子、伊呂波字類抄を代表する古写本などがあります。

**編** 購入はしていますか？

**日** 図書予算の範囲で適宜しています。

**編** どこに置いてありますか？

**日** 学科の書庫に和本専用のロッカーと耐火金庫を設置しています。別に、とくに貴重な写本とマイクロ・フィルムの保管は、大学図書館にお願いしています。

**編** 実際に見ることはできますか（他学科の学生も見られますか）？

**日** 原則として、日文科の閲覧室で利用できます。学科の区別なく、事務室カウンターで閲覧の手続きをしてください。

**編** 資料を検索していて、それが貴重書であるかどうかの判別はできますか？

**日** 請求番号の二段目に四ケタの数字がついているものです。

**編** どの程度利用されていますか？

**日** 頻度は少ないですが、主に大学院生が利用しています。学外の方も、事前の許可が必要ですが、研究のための利用が可能です。

**編** 保存のために何をしていますか（今後保存のために何か考えていますか）？

**日** 防虫、防湿を心掛けていますが、十分とは言えません。さらに環境整備を心掛けたいと思っています。

**編** 本が壊れた時はどうしていますか？

**日** 専門の業者に修理を依頼しています。

**編** 今後貴重書展示の企画などはありますか？

**日** 関連のある学会の開催時に、適宜展示します。

**編** 最後に何か一言…

**日** 多くの学生に利用していただきたいとは思いますが、和本の取り扱い方のわからない方も多いので、本を傷めるのが心配です。閲覧時には、万年筆やボールペンを使用しないなどのルールを守り、細心の注意を払って、汚したり壊したりしないよう、大切に扱ってください。

**編** ありがとうございます。

### 図書館は今

— 全国図書館大会に参加して —

第81回全国図書館大会に参加した。北から南から、館種を問わず約2,200名の図書館人が開催地の新潟に集まった。テーマに「日本海からのメッセージ」と冠し、副題に「生涯学習社会と情報化時代の図書館サービスを求めて」とある。折しもタイトルが示すとおり、図書館は今、大きく言って2つのうねりの渦中にあるように思う。

1つは、コンピューターによる急激な情報化への道である。分科会では「インターネット」や「マルチメディア」という新語が縦横に飛び交い、未来の図書館像が語られた。例えば、好きな時間にデータベースを検索したり、在宅のまま図書館の本を読んだり、海外に雑誌を発注したりできるようになる。新しい仕事としてサーチャーの需要が増し、これまで以上に著作権を順守することが大切になっていくだろう。われわれはコンピューターと向かい、自らの生活に同化させながら、積極的に情報を取り込まねばならない。21世

紀を目前に控え、夢を現実にする日は近い。

もう1つ、全国大会ならではの光景として、地域や児童を相手に働いている方や障害者のために奉仕している方の声も聞いた。そもそもこうした動きは地道ながら図書館活動の底流にあった。しかし技術が先行し情報が先鋭化していく一方で、生涯学習・福祉社会・高齢化社会ということが叫ばれ、今あらためて長い目で見た図書館員のあり方が問われているような気がする。図書館は人が集うところとして、われわれは人との触れ合いの中で、もっとハートを大切にすることを心掛けねばならない。サービスとは、決して大げさな押し付けではなく、むしろさりげない気配りでありたいと願う。

大会の合間に、神戸大震災の被災写真展を見た。図書館に備えてほしい本の展示を見た。息抜きに日本海に出て佐渡を望んだ。気持ちのよい3日間であった。

(和書係 霧島浩一)

### Ч, ch, tsch

— キリル文字検索事情 —

毎年、何冊か超マイナーな言語や異様な文字の洋書が整理課にやってくる。そんなお珍しい言葉は取り扱っておりませんのでお引き取り願うわけにはいかないから対応には苦戦する。中でもロシア語の本は、あの奇怪なキリル文字のせいでコンピュータ社会ではいささか肩身が狭い。検索は「翻字検索」というまわりくどい方法をとるから、利用する皆さんが苦心することになってしまう。

キリル文字（ブルガリア生まれの高僧キリルが創案）は、目録システムでは特別に2バイトコードで設計されていて、整理課の端末から入力が可能だ。一方、利用者端末からのMS-OPAC検索では、検索値に直接キリル文字を使えない。このため目録データを作るときに、キリル文字の情報のほかに、ロシア語の書名の発音をローマ字に変換（翻字という）したデータを入力して、ローマ字で検索できるようにする。厄介なのは、同じ発音でも翻字の方式によって表記が違うことだ。

1963年、初の女性宇宙飛行士テレシコワが宇宙から呼びかけた言葉 Я чайка! (わたしはかもめ) を翻字してみよう。米国議会図書館(LC)方式では  $\hat{I}A$  chaika、ドイツ方式では Ja tschaika となる。そこで図書館では、翻字はすべてLC方式に統一している。教訓その1。原書を探すときは、LC翻字表を検索のお供に。

Khrushchev, Dostoyevsky, Tolstoy...このように著者名としてのロシア人名は原綴ではなく、一定のローマ字形を決めて入力してある。だがその形を決めるルールは複雑にして怪奇。途中ルールの変更もあり、GLIMの森でもダブルスタンダードが起きているようだ。そのロシア人著者の綴りを正確に当てるのは競馬で当てるより難しいかも。「著者名典拠ファイル」という切り札がカウンターの端末に用意されている。教訓その2。ロシア人著者を検索するときは参考係を「検索の友」に。(洋書係 熊沢夕輝子)

## 点字の五十音

ア	イ	ウ	エ	オ	タ	チ	ツ	テ	ト	マ	ミ	ム	メ	モ	ワ	(キ)	(エ)	ヲ
カ	キ	ク	ケ	コ	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ヤ	ユ	ヨ			ン			長音符 促音符
サ	シ	ス	セ	ソ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ラ	リ	ル	レ	ロ				

## 活字のあとさき

むかしむかし、日本の印刷は「文字」文字活字を組むよりも、「一枚の板に筆写したものを彫刻するほうが盛んであったようだ。そのほとんどは漢字の書物で、仮名の書物は手書きだった。一時期木活字印刷が流行し、仮名の書物も印刷されたが、草書の流れる感じを残すために何文字かひとまとめにした連続活字が使われたりしたという。15世紀半ばに発明された西洋の鉛活字印刷術が日本で発展したのは、明治維新以降のことである。

日本語はとにかく文字数が多い。平仮名・片仮名・膨大な漢字、そして振り仮名などというオマケもある。それらをひとつひとつ拾って版を組んでいくのが活版だ。いかにはやく正確に美しく組めるか。それはまさに職人芸の世界である。しかしいくら職人が頑張ってもこなせる量には限度がある。

もっと手軽に効率よくできる印刷方法はないか。そこで生まれてきたのが写真植字である。文字盤から光線で「文字」ずつ焼き

付けて版をつくる印刷方法だ。戦後、手動から出発した写植は電算化されて現在に至る。そして、活版は過去のものとなりつつある。その状況は、中西秀彦著『活字が消えた日—コンピュータと印刷』（請求記号S739-36）を読むと分かりやすい。

この「来ぶらり」も電算写植の印刷物である。詰めたり離したり書体を変えたり大きさを換えたり手軽にいろいろできる。

従来縦にサラサラと流れていた日本の文字はいつの間にか縦横自在になった。書体は時代によって変化があるが、現在はどんな文字が好まれているだろう。

近年、辞書や新聞などをCD-ROMに収めてしまう電子出版も登場し、本は必ずしも「印刷物」ではなくなっている。電子化のますます進むなか、ディスプレイで読む「電子本」は流布していくのだろう。

いつか、ディスプレイに表示される文字が最も見慣れた文字だ、なんていう日が来るだろうか？（編集委員 篠原三佳）

※図書館1階の展示コーナーでは、1月中旬から3月末まで図書館所蔵の鉛活字組版を展示しています。この機会に、ホンモノの鉛活字をぜひご覧ください。

Fukuohmi  
福生氏ほえむ  
初めこそ大切な  
人に対しても世の中に対しても  
「読む—Y.Y.—」(茨木のり子)

来ぶらり No.52 1996年1月1日発行

発行責任者：森田道也 編集委員：冨田正貴 篠原三佳

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1

☎03(3986)0221